

令和元年6月19日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16674

研究課題名(和文) 亡命ロシア人芸術家たちの半世紀：創作の変化および現代美術史への影響と位置付け

研究課題名(英文) A Half-century of Russian Emigrant Artists: Transition of Their Creative Activities, Influence and Location on The Contemporary Art History

研究代表者

神岡 理恵子 (KAMIOKA, RIEKO)

早稲田大学・文学大学院・その他(招聘研究員)

研究者番号：10454000

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「第三の波」と呼ばれる1970年代以降に亡命したソヴィエト＝ロシアの芸術家たちの創作活動が、亡命前と比較してどのように変化したのか、作品・資料の分析と聞き取り調査の両面から研究を実施し、彼らの活動を美術史の文脈に位置づけることを目指したものである。亡命先での体験が作品に直接結びついた例もあるが(ラビンの作品、ニューヨークで展開されたソツアートなど)、聞き取り調査により、同時期に同じ場所に亡命しても、芸術家は個々に異なった状況下で制作し、亡命先の社会への適応度も様々であった点が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1) これまで亡命芸術家たちを包括的に扱う研究や、ソ連時代からの約半世紀にわたる連続性を視野に入れた体系的な研究はほとんどなかったため、本研究によって過去と現在とを接続し、空白を埋める役割を提示したこと。2) 創作活動の考察に際し、資料や作品の読解と当事者の証言の分析とを同様に重要なものと位置づけ、領域横断的な方法で研究を行ったこと。3) 実施した聞き取り調査資料は将来的には公開の可能性も考えられるため、独自のアーカイブの構築に着手したこと。4) 聞き取り調査を実施するなかで、研究課題を発展させるための(国際)共同研究の実施へとつなげ、国内外で成果の一部を発表したこと。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to investigate the transition of the Russian exiled-emigrated artists' artworks before and after exit from the USSR in the 1970s and 1980s, called as a "third wave", researching in two ways: analysis of works-materials and interviews. To verify the location and influence of their activities in the contemporary art history, interviews were mainly conducted with artists emigrated to New York. Although there are examples where the experiences in the new world was directly linked to the artworks (for example, Sots-art in New York), interviews showed us that artists produced artworks individually under different circumstances and adaptability to the new society, even if they had exiled to the same place at the same time.

研究分野：ロシア文化

キーワード：ソ連非公式芸術 亡命ロシア人 現代美術 ロシア現代美術 コンセプチュアル芸術 ソツ・アート エスノグラフィ

## 1. 研究開始当初の背景

1970年代以降のソ連では多くの芸術家たちが西側諸国に亡命したが、その後、彼らの多くは亡命先の都市を中心拠点にし、現在も世界の現代アートの第一線で精力的に活動している。ロシアでは2005年にモスクワ・ビエンナーレが始まり、彼らの作品をロシア国内でも目にする機会が多くなったが、亡命芸術家たちの活動を体系的に網羅した文献・資料がまだ少なかったため、より多くの情報を求めて当事者や関係者たちへの聞き取り調査を独自に開始した(第2回から現地調査を開始)。その過程で作品の鑑賞や分析、文献の読解だけでは見えてこない貴重な情報を得ることができるようになり、より積極的に聞き取り調査を行う必要性を感じた。折しも、第一線で活躍する亡命芸術家たちの高齢化で世代交代が始まっていたため、とりわけ聞き取り調査の実施は喫緊の課題であった。

また2010年前後から、ロシア国内では第二次大戦後のソヴィエト非公式芸術運動(とりわけ1960年代の「ノンコンフォルミズム」と1970年代以降の「モスクワ・コンセプチュアリズム」)を歴史的な視野で位置付けたり、世界の美術史のコンテクストに「書き込んでいく」ような動きが活発になっていた。これまでその多くが国外での所蔵だった作品がロシアン・マネーによって買い戻され、新旧の美術館やギャラリーに所蔵されるようになり、ロシア国内でも作品を実際に鑑賞できるような環境が整いつつあった。こうした動向に続き、作品だけでなく膨大な資料やアーカイブが相次いで公開されたり出版されたりし始めた。現代における美術界の動向は変化が目まぐるしく、ロシアも例外ではないため、こうした好機を逃さずに調査を進める必要があった。

## 2. 研究の目的

ソ連の非公式芸術は、ペレストロイカおよびソ連崩壊と前後して西側でにわかに注目を浴び、特にアメリカではこの時期に数多くの展覧会が開催されたほか、亡命芸術家たちへのインタビュー集も出版されている(*Soviet Dissident Artists: Interviews After Perestroika*. 1995など)。現時点から振り返ると、「鉄のカーテン」の向こう側への一連の関心には、冷戦当時の情勢が影響していたことは否めない。この時のような関心は長くは続かず、その後はこのような規模での継続的な展覧会開催は行われてこなかった。個々の芸術家やグループについて研究されることはあっても、亡命芸術家たちを包括的に扱う研究や、ソ連時代からの約半世紀にわたる連続性を視野に入れた体系的な研究は、国内外を見てもまだほとんどなかった。本研究の目的は、こうした過去の研究と現在とを接続し、空白を埋める役割を果たすことである。

また本研究は、戦後のロシア地域研究/ロシア文化研究であるばかりでなく、同時にアメリカやヨーロッパを含む文化研究であり、さらに美術史研究、エスノグラフィを用いた社会学的な研究の側面も合わせ持つ。これら複数の方法と観点から、後期ソ連で誕生した新しい芸術運動が、その担い手たちの亡命という「移動」によって世界的な文脈にどう浸透したか、当事者の証言を記録しつつ、歴史のなかに位置付けることを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究は、「作品・資料研究」と「聞き取り調査」という二つの柱から成るが、この方法をさらに細かく分け、以下の4点から研究を進めた。

(1) 亡命芸術家たちの亡命以前から現在までの大まかな創作活動を個別に概観する。

既に収集したものも含めた文献を読解・整理し、不明な部分は聞き取り調査で補う。本研究では、特に「第三の波」と呼ばれ1970年代から80年代の前半にかけて亡命した芸術家が多かったニューヨークを中心に調査することとする。

(2) 創作(活動)の亡命以前/以後の変化、ソ連崩壊(~1990年代)からグローバル化(2000年代降)の時期の変化を捉える。

文献や作品等資料の分析、および聞き取り調査とその分析という両面から、相互補完的に進める。

(3) 創作(活動)が国内外で与えた影響を見極め、世界的な文化史/美術史の文脈へ位置付ける。

国内外への影響は、創作(活動)の紹介と批評形成に貢献したメディア(亡命雑誌『第三の波』『A-Ya』など)の役割の考察と、国外での収集/紹介/研究拠点となった

美術館等での調査を中心に行ない、同時代の世界的動向と照らし合わせる。

上記の方法に留意することで、資料分析や聞き取り調査自体を目的とってしまうのではなく、最終的に調査対象となる芸術家たちの創作活動の歴史的位置付けと影響を解明する。

#### 4. 研究成果

##### (1) 聞き取り調査と資料収集

本研究の開始から終了までの4年のあいだに、亡命ロシア人芸術家たちを取り巻く環境は大きく変化した。当初の予想よりも急速に世代交代が進み、それに伴って公開される関係資料も多岐にわたったため、研究期間を通じて資料収集と聞き取り調査を継続的に実施した。27年度(2015)と29年度(2017)はモスクワ・ビエンナーレの開催年に該当したため、現地調査と関係者への聞き取り調査を実施した。2005年に第1回が開催したモスクワ・ビエンナーレも、第6回を数えた2015年で10年がたち、2017年の第7回から開催形態が大きく変わった。ビエンナーレを立ち上げ、長年コミッショナーを務めていたキュレーター/美術史家のヨシフ・バクシテインが去り、運営体制も新しくなった。バクシテインは本研究が調査対象とするソ連の非公式芸術、とりわけ1970年代以降のモスクワ・コンセプチュアリズム・サークルで活動していた当事者であった。本研究の開始以前に実施した調査を踏まえても、第6~7回の開催におけるソ連非公式芸術および亡命芸術家たちの出展数は激減しており、ビエンナーレの調査だけをとっても世代交代の様子は明らかであった。開幕からの10年間についての調査をまとめ、同時代のロシア社会の変遷のなかに位置付ける論考を現在準備中である。

28年度は8月にモスクワで調査を実施し、非公式芸術の芸術家や関係者たちに聞き取りを行った(5名)。比較的新しい現代アートミュージアム「GARAGE」のアーカイヴと図書館で調査を行い、責任者のオボホワ氏にも聞き取り調査を行った。これがもとで、本研究をさらに発展させるための国際共同研究への協力を依頼し、研究を実施することになったのも調査の成果の一部である。続く9月に実施したニューヨークでの聞き取り調査では、亡命芸術家および関係者たちに長時間の聞き取り調査を実施し(7名)、アメリカでの収集/紹介/研究拠点となったラトガース大学のジマリー美術館でアーカイヴ調査を実施した。この時にも同大学のシャープ教授、同美術館のドッジ・コレクション(ソ連非公式芸術を中心とする)の創設と展示運営に携わった美術史家のローゼンフェルド氏と関係を築き、共同研究を実施する運びとなった。また、活躍中の亡命芸術家としては最年長であったレオニード・ラムへの調査をもとに、帰国後論文を発表した(雑誌論文)。ラムは戦後ソ連の非公式芸術、および亡命芸術家としての活動を代表する人物であったが、惜しくも2017年に他界した。論文で亡命以前・以後と比較した作品の変遷を、調査で本人から得た情報と資料の両面から分析できたことは貴重な一成果であり、戦後の非公式芸術にロシア・アヴァンギャルドが継承された点、1960年代初頭からコンセプチュアルな作品を制作した先駆性を考察した。

亡命先で芸術家たちが創作活動を行った状況は時期や場所ごとにまとめて結論づけられるものではなく、個人によって実に様々であったことが聞き取り調査で明らかになった。亡命以前からの知名度、言語習得の度合い、創作環境、交友関係、家族の状況などが各自異なっていただけでなく、精神面でもそれぞれ異なっていたのである。そしてこれらの事象の体験が、直接作品へと結びついた例も多数確認することとなった(亡命後のO.ラビンの創作、1980年代後半~1990年代半ばのニューヨークにおけるソツアートなど)。今後はこれらの調査結果を踏まえ、資料や作品の分析を行う必要がある。

##### (2) アーカイヴ研究への視点と(国際)共同研究への発展

本研究を計画した背景に、ソ連の非公式芸術に関する資料や書籍が数多く世に出るようになり、国際的な美術史のコンテクストに位置づけようとする動きが活発になっていた点を挙げたが、1970年代に登場したモスクワ・コンセプチュアリズムのグループの創作活動には、アーカイヴという視点が当初から備わっていた。彼らの1980年代初頭のプロジェクトの一つ『MANIファイル』はまさに、仲間の相次ぐ亡命による活動の縮小を危惧し、作品や資料をアーカイヴしたタイムカプセルのような作品であると同時にサミズダート(地下出版/自家出版)でもある。このプロジェクトを現代における展示、ドキュメンテーション、アーカイヴ化の問題と関連付けて特徴を分析したものが「学会発表」である。さらに、このグループの若い世代の中心であり、上記の作品にも参加した芸術家ワジム・ザハロフが取り組むアーカイヴの問題とモスクワ・コンセプチュアリズムにおける彼の役割を検討したのが「雑誌論文」である。ドイツを拠点に1980

年代から出版にも携わり、現在は web でアーカイブも運営する彼の創作を調査することは、ソ連の非公式芸術と亡命芸術家たちの周辺で現在進行する「歴史化」「アーカイブ化」の問題と亡命雑誌研究とを接続させ、発展させる契機となった。

このほか、「学会発表」での対話を機に3名の研究者（河村彩、鈴木佑也、生熊源一）と共にロシア現代美術研究会を立ち上げることになった（web は下記を参照）。研究初年度にこうした機会を得た意義は大きく、その後定期的に研究会を実施したほか、モスクワ・コンセプチュアリズムの起源を考えるパネルも企画し、国内外での学会で成果の一部を発表した（学会発表）。なお を発表した際のパネル全体に関しては、『ロシア語ロシア文学研究』49号、2017、278-285 にロシア語による概要を掲載。[http://yaar.jpn.org/robun/RLL-49\\_20171004.pdf](http://yaar.jpn.org/robun/RLL-49_20171004.pdf)）。近年、非公式芸術に関する膨大な資料が次々と公開されているため、今後は共同での調査・研究はとても重要となっていくと考えられる。研究会では現在、20世紀のロシア美術に関する重要書（E. Дёгодь, 2000）の翻訳も進めており、活動を継続していく予定である。

### （3）国内外への影響とメディアの役割

第三の波の亡命者たちも、従来の亡命社会に倣って表現活動を行ったり情報を発信するために雑誌の出版に従事したが、とりわけ『第三の波』誌（コレクターの A. グレーゼルが1976年に創刊、1986年まで刊行）と『A-Ya』誌（亡命芸術家 I. シェルコフスキー、A. コソラポフらが1979年に創刊）が亡命直後の非公式芸術を国外へ紹介した点で重要である（国外出版の雑誌は、同時に、外からソ連国内に働きかける役割も担っていた）。前者は、グレーゼルが自身のコレクションをもとに亡命先のパリ郊外で立ち上げた亡命美術館と出版事業がもとになっていた。分析を進めることで明らかになったのは、この雑誌は主にパリに亡命した非公式芸術家たちの過去と現在の作品を紹介し、欧州やアメリカでの展覧会開催を推進し、亡命先での芸術家たちの活動を全面的にサポートしていたことである。展覧会の動向をレポートする中で、ソ連の非公式芸術（主に1950年代末からモスクワ郊外で展開されたリアノゾヴォ派と、1960～1970年代のノンコンフォルミズム）を「正しく」理解してもらい、同時代の国際的な美術の文脈に位置づけていこうとする試行錯誤がなされていた。その過程で西側の最新の動向、およびソ連の地下から出た別の勢力（キネチズム、コンセプチュアリズム）とのせめぎ合いが展開されてゆき、亡命先での活動と受容の困難さを読み解くことができた。

一方、後者の『A-Ya』誌（1979-1986）は、1970年代半ばからモスクワで展開された新しいコンセプチュアリズム芸術の当事者たちによって亡命先で創刊・編集され、パリ・ニューヨーク・モスクワをつなぎ英露二か国語併記で発行された。作品をカラーで掲載したページも多く、当初から自分たちの活動を世界に発信していく志向があっただけでなく、3拠点をつないで雑誌を編集すること自体が一種の創作活動でもあった。编者たちへの聞き取り調査から明らかになったのは、亡命先では創作をなげうって編集に集中した生活を送ったり、新たな表現活動の発表の場として雑誌を活用したり、いずれにせよ、創作活動において雑誌が非常に大きな役割を果たしていた点である。2019年には、編集の際にやりとりされた書簡（1976-2001）集が2巻本で出版されたため（Сост. И. Шелковский, 2019）、さらに多くのことが明らかになると考えられる。

これら2誌を含むソ連後期の国内外の地下出版誌については、「学会発表」で報告を行なった。また『第三の波』誌が展開したソ連非公式芸術の伝播と位置付けについては、現在論文を準備中であり、2019年度中に発表する予定である。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計2件)

神岡理恵子、ワジム・ザハロフとモスクワ・コンセプチュアリズム：アーカイブへの欲望とその埋葬への軌跡、ロシア文化研究、査読無、23、2016、57-74

神岡理恵子、ソヴィエト非公式芸術におけるロシア・アヴァンギャルドの継承者：レオニード・ラムと初期の創作、早稲田大学文学研究科紀要、62、2017、277-286  
[https://www.waseda.jp/flas/glas/assets/uploads/2017/03/2017\\_kamioka\\_277-286.pdf](https://www.waseda.jp/flas/glas/assets/uploads/2017/03/2017_kamioka_277-286.pdf)

### 〔学会発表〕(計4件)

Камиока Ризько, Стратегия «документации» и «архивов» в проектах Московского

コンセプチュアリズム: О папках МАНИ, The 9th World Congress of ICCEES, Makuhari, Chiba, Aug 8, 2015

神岡理恵子、モスクワ・コンセプチュアリズム：始まりと生成、日本ロシア文学会研究発表会、北海道大学、2016、10月22-23日

Камиока Риеко, Московский концептуализм: начало и становление в контекстах Западного и современного художественного процесса, The 8<sup>th</sup> East Asian Conference on Conflict and Harmony in Eurasia in the 21 Century: Dynamics and Aesthetics. Chung-Ang University, Seoul, Korea, 2017, Jun 3

神岡理恵子、戦後ソ連におけるサミズダート/タミズダートについて：非公式文学/芸術分野を中心に、20世紀メディア研究所第114回研究会、早稲田大学、2017、10月28日

〔図書〕(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

ロシア現代美術研究会

<https://rusconart.wixsite.com/home>

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

神岡理恵子 (KAMIOKA Rieko)

早稲田大学・文学学院・招聘研究員

研究者番号：10454000